
序にかえて

一般教育から基礎教養教育へ — 1980年以降の変遷を振り返って —

女子栄養大学教授 橋 本 紀 子

はじめに、本学に着任して以降の研究と教育活動を振り返る機会を与えていただいたことに感謝する。総説では、担当分野の研究・教育動向について述べたので、ここでは、私が所属した一般教育分野の1980年以降の変遷を振り返りながら、最後に、自分の専門としていた教育史研究についても触れることにしたい。

1. 1980～1993年 —「大学設置基準」で単位数が決められていた時代

本学に着任した当時の履修要綱によれば、リベラルアーツ重視の戦後の大学のあり方を示した「大学設置基準」（1947年制定の学校教育法施行規則66条に示され、1956年省令化される）の規定通りの分野と単位数が示されている。すなわち、人文科学、社会科学、自然科学はそれぞれ、8単位以上、総合講座も含めて、36単位以上を履修しなければならないとされる。また、これらの諸科目は、「現代における科学・技術の発展の水準について学び、科学的な探求精神、芸術的な創造精神にふれ、同時に学問研究の基本的な方法論を習得すること」を目的としておかれ、さらに、栄養学の「基礎を培う」という役割も課せられていた。これは、栄養学が、「人間」とその「健康」を自然科学的な側面からだけではなく、人文・社会科学的な側面との関連からも考究するという、幅広い幅をもった学問だからである。

中でも、総合講座としての現代科学講座は、本学独自のもので、4年間にわたって開講されていた。1年前期の〈入門〉で、大学と学問、現代の科学と技術、人間とは何か、教育の本来的意義、栄養学の実践、食の哲学について、講義やパネル・ディスカッションを通して学び、1年後期と2年前期は自然科学論、2年後期（一部は2年前期から）には、プレプロゼミ（専門の前段階のゼミ）が置かれ、一般教育科目担当者ばかりではなく、専門科目担当者の多くがゼミを担当していた。3年には社会科学論が置かれ、4年は「学問の総合と実践」として、本学で学んだ諸科目について振り返り、自分なりの体系化

と実践への展望をもって卒業できることに役立つようにと企画されていた。

人文・社会科学関係の一般教育科目は、1年から3年までに開講されており、専門科目と併存する楔型のカリキュラムであった。1993年の履修要綱では、卒業必修として、現代科学講座が2単位以上とされたが、それを含めて、36単位以上という点は変わっていない。

この他、外国語科目が選択必修で8単位（演習科目）、さらに、保健体育科目が必修で4単位置かかれているという点も従前と同じである。

2. 1994～2002年 —専攻毎に基礎教養科目が定められていた時代

「大学設置基準の大綱化」と呼ばれる大学教育改革の流れの中で、教養教育の見直しが叫ばれ、本学でも専攻毎に一般教育の位置づけについての議論が行われた。セメスター制の導入ということで、これまで、通年4単位であった一般教育科目も半期2単位だけの開講となり、代わりにさまざまな新しい科目の創設が行われた。1994年から履修要綱は現在のようなシラバスも記載するものへと変わり、一般教育の名称も基礎・教養へと変化した。

文化栄養学科を除く3専攻の履修すべき基礎・教養科目の単位数は外国語科目も含めて、栄養学科実践栄養学専攻は22単位以上（1997年から20単位以上）、栄養科学専攻は34単位以上、保健栄養学科（臨検コース、養護コース）は29単位以上となった。外国語は実践が4単位以上、科学と保健は従来通り8単位以上であったから、従来の一般教育の必要単位数が半減した専攻もできたことになる。基礎教養科目にあった総合講座は専攻によって専門科目や総合分野に位置づけられて継続した。新しい科目として自然論、文化論、社会論などが設けられた。栄養科学専攻にはこの他に、現代社会論や現代文化論なども新設されている。通年4単位で行っていた科目を半期2単位で行うことから、内容の精選が求められた。新

設科目も含め、半期開講の科目を多数講義しなければならないことから、講義の準備に多くの時間を取られ、落ち着いて研究、教育活動に向かう時間は減少した。

その後学内では、バブル景気崩壊後の少子高齢化社会を生き残るための学科の理念の再構築、再編等の議論が進められ、基礎・教養科目とその必要単位数への一層の削減要求も強まった。また、基礎・教養科目の新設、改廃、名称変更等が、専攻ごとに行われていることの煩雑さや、全学生共通の基礎・教養科目であるべき等の意見も出て、2001年頃には教養教育検討会議が発足した。

3. 2003年以降－栄養学部共通科目として基礎・教養科目が位置付けられた時期

2003年には現在の3学科構成、実践栄養学科（200名定員）、保健栄養学科（栄養科学専攻、保健養護専攻）文化栄養学科（2006年から食文化栄養学科）という現在の形になり、基礎・教養科目は必修単位を含めて栄養学部は人文科学、社会科学、自然科学及び外国語（講義科目）からそれぞれ6単位以上合計24単位以上を履修することとなった。語学は2年前期までの1年半の開講で、演習科目から講義科目となり、実質授業時間は当初の8分の3に減少した。

基礎・教養教育会議は女子栄養大学教授会運営規定に載る正規の会議体となり、会議体構成員は当時の学部長指名で決まり、教養教育検討会議の代表であった橋本が、引き続いて2003年1月～2005年12月まで代表を務めることになった。80年代に比べ2倍近い学生たちが入学してくるようになり、高校で化学、生物を履修してこなかった学生たちへの対応や、読解力も含めた基礎学力向上のための課題に取り組むことになる。これには自然科学担当教員の膨大な時間とエネルギーが注がれることになった。

着任以来、35年間で大学教育の様相が大きく変わっていることを感じる。

1980～1993年頃までは一般教育部会があり、そこで、

先輩教授の学習講演会が行われていた。

終わった後、大学の校門近くにある安兵衛という居酒屋で飲み会をしたことなどを懐かしく思い出す。

もともと教育史専攻であった私は、民間教育史料研究会に属しており、政策側の意図した歴史ではなく、民間にあった産育、教育習俗を掘り起こし、人々の「生きられた歴史」を紡ぎだすという立場からの教育史研究を進めていた。同会は、1970年代後半から1984年までは、“1920年代日本の自由教育と生活教育の理論と実践の総合的解明”，1985年から1997年までは、“1930年代の教育科学研究会（全国に支部あり）の理論と実践の解明”，1998年から2011年までは“1960年代高度成長期日本の青年の社会的自立と教育－地域、学校、家族の視座から”という共通テーマのもとに、各人の関心のある部分を担当しながら、文献調査、現地調査、関係者への聞き書き調査等、それぞれ10年単位の共同研究を継続し、その成果を毎回、大部の著作として刊行してきた。

1995年から大学院に所属するようになり、自分とは全く異なる領域、職種で、様々なテーマを持ってやってきた院生たちと向き合い、私の歴史研究は夜中の作業になることが多くなり、終盤には民間研の例会に参加するだけのような状態になったが、それでも、歴史研究も含め、研究への継続したエネルギーは意外と修論や博論が終わった後の院生との打ち上げや民間研の例会後の談笑など楽しかった思い出によって、絶えず補給されていたように思う。戦後民主主義がまだ、息づいていた時代から、新自由主義、新保守主義の台頭する時代を本学の基礎・教養教育の担当者として過ごしたことになる。

今後、大学はますます「生き残り」をかけた改革を続けざるを得ないと思われるが、基礎・教養教育は、「自由な思考に対するより多くの背景と、職業的訓練を基礎づけることのできるよりすぐれた基盤を与える」ための科目として期待された戦後の大学発足時の理念を今後も創造的に発展させることを求められ続けるであろう。

本学のますますの発展と皆様の健闘を祈ります。